

はくぶつかんの部屋 26



沖縄戦・戦後70年展にむけて

2015年は戦後70年の節目であり、各地でそれに因んだ催しが企画されています。この70年という言葉がキーワードになります。沖縄にとつては

縄戦から70年でもありません。20万余の尊い命が失われた沖縄戦。わたし達の宜野湾市でも戦前の人口1万3千人余のうち、およそ27%の3,600人余が犠牲になりました。地域の洞窟に避難し、爆音が響き、暗い中でじつと隠れる日々、戦闘から逃れる中で攻撃を受けて犠牲となった方もいました。また、本島中部において日米間の組織的な戦闘の激戦地の嘉数高地では、多くの戦死者が出ました。

戦後の始まりも人それぞれで、米軍上陸後、4月に米軍の捕虜となり、野嵩や北谷の砂辺の収容所に一時収容され、その後北部へ移送された方には、早い、戦後の始まりでした。一方で南部へ避難しました。しかし、避難の最中、家族や親類、仲間を失うなど、被災状況は異なります。

戦後生活も故郷が米軍基地に接収されて大きく変貌し、帰る場所を失った方も

いました。また、米軍統治の下、生活物資や食糧不足、治安の悪さもあり、辛い生活を強いられながらも、そこから立ち上がろうとする人びとの生きる力を強く感じます。だからこそ、今のわたし達が存在しているのであり、命の尊さを感じます。

市立博物館では沖縄戦・戦後70年の企画展と市民講座を開催します。6月は沖縄戦を、7月は戦後復興をテーマに企画展を行います。沖縄戦から70年が経過し、戦争体験者も減りつつあるなか、戦争に対する風化が危惧されており、戦争と平和を考える機会でもあります。時期や時代の節目を読み取り、展示や講座を通して多くの方々へ学びの場をご提供するのにも博物館の役目です。多くの皆様のご来場、お待ちしております。



家屋から火の手が上がる宇地泊(上)
日本軍の砲撃を受ける米軍(下)
1945(昭和20)年

企画展「沖縄戦から70年―戦場の宜野湾―」

会期：6.17(水)～7.5(日)

入場：無料

*博物館ホームページもご覧ください。

お問合せ：870-93317 市立博物館

茶ぐわーゆんたく 134

アラグスクガーで団結

もうすぐ慰霊の日。今年は戦後70年という節目の年です。

沖縄戦で戦場となった宜野湾村(現市)では、集落の近くにある自然洞窟に隠れて生き延びた人々がいました。今回は、その中から新城のアラグスクガーについて紹介します。

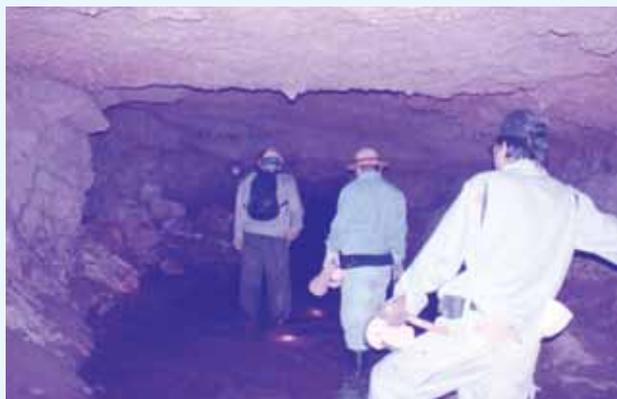
アラグスクガーは、現在の市民広場近く(普天間飛行場内)にある全長415mの洞窟です。1945(昭和20)年3月末、ここには新城の住民約300人が避難していました。洞窟内には水が流れており、避難場所としては最適だったのです。

毎日のように砲弾が飛んでくるなか、警防団長が皆をまとめ、「全員どんなことがあっても死ぬことは考えないこと」、「米兵に見つかったら抵抗しないでいう通りに行動すること」、「隠れている間は班長の指揮に従うこと」と確認し合いました。

同年4月5日、アラグスクガーは、上陸5日目にして進攻してきた米兵に見つかってしまいました。この時、住民たちははじめは抵抗しようと考えましたが、アメリカ帰りで英語を話せる人に米兵への交渉を託しました。その結果、全員無事に救出されたのです。

新城では、住民のほとんどがこの洞窟に避難していたため、犠牲者が少ない地

域だと言われています。しかし、宜野湾村全体の被害は大きく、特に自然洞窟が少ない長田や志真志、激戦地となった嘉数の住民はほとんどが島尻へ南下して逃げ場を失い、多くの犠牲者が出ました。みなさんの住む地域では戦時中どのような出来事があったのか、この機会に調べてみてはいかがでしょうか。



▲アラグスクガー内部 2012年撮影

「宜野湾市史」への問合せ
市立博物館 ☎870-93317